

2013年6月2日 礼拝説教(要約)

聖書 ペトロの手紙一5章1-4節

「群れの模範として」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ペトロは諸教会で労苦する仲間たちに勧めます。「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい」。ペトロがこのように語る時、彼は復活の主イエスにガリラヤ湖畔でお目にかかった時のことを思い起こしていたのではないのでしょうか。ヨハネによる福音書21章に記されている場面です。復活の主は弟子たちと食事をされた後、シモン・ペトロに「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」とお尋ねになりました。ペトロはただちに「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答え、主イエスから「わたしの小羊を飼いなさい」と命ぜられます。けれども、この質問は一度だけではなく、二度、三度と繰り返されました。ペトロは、「わたしを愛しているか」と繰り返される主の問いに、誰よりも強がりを行いながら、主を三度も否んだ日のことを思い起こさずにおれなかったことでしょう。しかし、かれは悲しみのうちにも、今の気持ちをせいっぱい主に申し上げます、「主よ、あなたは何かもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」。それに対して、主は「わたしの羊を飼いなさい」と言われ、「わたしに従いなさい」と言われたのでした。

この場面は、ペトロの牧師就職式だと言った人がいます。弱さを知ったペトロが、あらためて復活の主に召されて、その務めにつかされたのです。いや、ペトロだけではなく、おおよそ主に招かれ、主の後に従おうとする者はみな、「わたしを愛するか」との主の問いに答えなければなりません。そして、「わたしの羊を飼いなさい」と言われる主の委託に答えていくのです。自分自身も迷いやすい羊として、しかし、その群れの一員とされて、その群れがキリストの群れとして共に歩いていくことができるように仕えるのです。

「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい」。ここで、教会が神の羊の群れと言われていることをよく心に留めておきたいものです。教会は誰のものでもなく神のものなのです。パウロが、実に人間的な混乱と争いの絶えないコリント教会に対しても、その手紙の冒頭で「コリントにある神の教会へ」と書いていることを忘れてはなりません。

牧するとは、羊飼いが羊たちを草や水のあるところに導き、彼らを見張り、彼らをさまざまな危険から守ることをさしますが、神の羊の群れである教会に連なる私たちは、主イエス・キリストの福音の言葉によって、養われ、教えられ、戒められ、導かれるのです。

そしてペトロは、私たちが神の教会に仕える務めを果たすために大事な三つの原則を挙げています。

第一は、「強制されてではなく、神に従って、自ら進んで」ということです。与えられた務めは、主ご自身から委ねられたのです。委ねられたというのは、信頼され、まかされたからです。信用できない、不真実な人間でした。しかし、主イエス・キリストと出会い、罪の赦しにあずかり、主の霊をいただいて生きるものとされたのです。そんな私たちが主が用いてくださるのです。それゆえ、いやいやするということではないはずです。もちろん、強いられる形でせざるを得ないこともあるでしょう。しかしその場合も神の恵みによって強いられているのです。

第二は、「卑しい利得のためにではなく献身的にきなさい」ということです。この世のどんな仕事でも利害打算だけでしてよいはずはないし、それでは良い仕事はできません。まして、主の業です。「献身的に」とあるのは、熱心にとか喜んでという意味の言葉ですが、損得の計算とは正反対の熱い心でということなのです。パウロが言うように、「主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」(コリント一 15 : 58)。

第三に、「ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ群れの模範となりなさい」とあります。およそ誰であっても、主の教会の奉仕に召し出された者はすべて、仕える僕となるのであって、決して群れに対して権威を振り回し、権力を行使するというのであってはなりません。ここでも、ペトロは主イエスと共に過ごした日々を思いだしていたのではないのでしょうか。弟子たちは、何かある度に、自分たちの中で誰が一番偉いかといった話をしていました。ペトロは、おそらく、誰が何と言おうと、主を愛し、主に仕えるのは、自分が一番であるという自負をもっていたのではなかったでしょうか。けれども、そんな弟子たちに主イエスは言われました、「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」(マルコ 10 : 43~44)。主イエスご自身が、僕の道に徹して歩まれた以上、その主に救われた私たちが横暴にふるまえるはずはないのです。

「群れの模範になりなさい」とは厳しい言葉です。だれがその言葉に耐えられるであろうか、と思います。しかし、それは、何か立派なことをして皆を感心させてやろうということではないし、そんな風に意気込んだところで、何かできるわけではなく、惨めな失敗をするだけでしょう。大事なことは、ただひたすら主イエスを見つめ、主に率先して従おうということなのです。主とその御言葉に従順であることです。「教会は華やかな人格を必要としているのではなく、イエスと兄弟たちに対する真実な仕え人を必要としているのである」(ボンヘッファー『共に生きる生活』IV章末尾)は味わうべき言葉です。